「誰？」

高谷信之

登場人物

男

女

若い男

灯りが点くと、椅子がある空間があり、誰も居ない。
ここはどうやら、地下の部屋らしい。ややあって、ドアが開く。
中年の男が鞄を抱えてこの空間に入ってくる。続いてすぐに若い女入って来る。

男　ほう、こんな感じ。
女　そう、こんな感じ。
男　いやあ、しかし・・・
女　イメージ違った？
男　あゝ。
女　どんな風だと思った？
男　いや、どんなって・・・意外とすっきりしてて・・・
女　もっとごちゃごちゃしてると思ってたんでしょ。
男　そうだな。
女　ごちゃごちゃ散らかってて・・・
男　物が少ないね。家具とか・・・
女　家具は持たないようにしてるの。

男　そうか・・・
女　物を持つと執着心がぬけなくなるでしょ。
男　それはそうだ。
女　物を持つと人間って醜くなるわ。
男　考えた事もなかったよ、大人なんだね君は。
女　別に、普通よ、それなりだわ。それより・・・
男　何？
女　座ったら。
男　あゝ・・・おかしいよな、鞄持ったままで、（ト椅子に座る）どうかしてるよ。
女　そんなことないわ。冷静だったらおかしいでしょ。
男　どうして。
女　だって、若い女の部屋に初めてやってきて、動揺しないような無神経な人は駄目でしょ。
男　それはそうかもしれない。
女　もっともそんな人は、初めから、呼ばないけど。
男　あゝ、でもなんで、わたしなんかをここへ。
女　（含み笑いで）今にわかるわ。

男　なんかやだなー、その言い方。
女　嫌？
男　いや、いやじゃないさ。そうじゃなくて。
女　なんか飲みます？
男　あゝ、そうだな。
女　ワインか、ウイスキーしかないの。
男　そうだな、水割りがいいかな。君は？
女　わたしもいただくわ、同じ物。
男　あ、だったらワインにしようか？
女　いいえ、ウイスキーの水割りがいいわ。
男　そう、それならいいんだ。
女　どうしたの変よ。いつものあなたらしくないわ。
男　いつものあなたって、その・・・わたしたちはまだ会って三回目だし・・・
女　そうね。でも、遠慮はやさしさとは違うわ。
男　遠慮がすぎるかな。
女　そういう風に考えないの、自然なままでいいじゃない。
男　それはそうだが、わたしのような、そのう・・・

女　何？

男　年を食った、つまり君にはたして僕、いやわたしが相応しいかどうかと言う。

女　何それ？（部屋を出て行く）つまんない。

男一人になり、改めて周囲を見回す。

男　つまんないか・・・嫌われちゃったかなちょっぴり・・・いや、そうでもないか、自然に、自然な感じに・・・でもあれだな、ついてるよな。違う、そうじゃない。そういう時代なんだ、時代は古いな、時、時の流れ・・・あるんだなー、運がいいって言うか、ラッキーっていうかこんな事って・・・

女　どんなこと？（水割りの入ったグラスを持って入ってくる）

男　あーいや。なんでもない。

女　やだー、何か考えてたでしょ、Hな事。

男　まさか、考えてないよ、そんな事。

女　そんな事って、どんな事？

男　だから・・・

女　フフフ、困ってる。可愛い。乾杯しましょう。
男　あゝ、乾杯。
女　待って、（ト片手で男の手を抑える。男ドキッとする）何に乾杯？
男　そうだな、君の未来に。
女　私たちの明日に。
男　乾杯！
女　乾杯！　（男と同時に）

男はちょびっと、水割りをなめるように飲む。対して女は普通に飲んで。

女　あらっ・・・
男　何？
女　お酒飲めるくせに。
男　飲めるよ。どういう事？
女　だったら、そんな乾杯はいや。もっとぐっと飲み干さなきゃ。
男　あゝ、そうだね。でも・・・
女　どうしたの？

男　まだ、実感が沸かなくって。
女　なんの実感？
男　こうして、君のような、若い素敵な人と、いや、君の部屋にこれたなんて・・・
女　嘘ばっかり。
男　何が？
女　若い女の人に囲まれて、もてまくってるんでしょ。
男　そんな事はないよ。それは世間のもってるイメージだ。実際には、それ程もてないし、若い人との交流なんて何もない。
女　でも、お金だってあるでしょ。有り余るほど。
男　そんな・・・
女　あら、それじゃあ貧乏なの。
男　いやあ、それなりにそのう・・・同年代の人よりは多少・・・
女　多少？
男　多少は稼いでるかもしれない・・・でも・・・あれ？
女　なあに？
男　まさか、そういうことじゃないよね。
女　どういうこと？

男　いや、いいんだ。
女　言いかけてやめるなんて一番失礼よ。
男　そのう・・・もしかして・・・わたしよりもわたしのお金―
女　酷い！嫌！下品ね。
男　あ、いや、そういうつもりじゃないんだ。
女　どういうつもりなの？わたしが、お金目当てで、あなたをここへ呼んだ。そう思ったのね。
男　いいや違う！
女　違う？だったら何？言ってごらんなさいよ。少なくとも一瞬でも、そう疑ったでしょ。
男　それは、今の世の中が、ほら色々と物騒で・・・
女　関係ないわ。
男　それは・・・
女　世の中がどうでも、わたしとあなたが偶然に出会って、お互いに興味を持って、それから少し好きになって、こうして、ここへ来てもらったのに・・・酷い。（言いながら、涙ぐみ顔を覆う）
男　ごめん。あやまる。すまなかった。勿論君がお金めあてで、わたしに近付いたなんて、思ってやしないさ。君は・・・

女　いや！（ト肩を揺すって）
男　君に・・・
女　君はいや、名前で呼んで・・・
男　あゝ、いずみさん。あ、いやいずみちゃん。
女　なあに、勇三さん。
男　だから、思ってないって。
女　何を？
男　だからいずみちゃんがそのう、なんかを狙ってわたしに近付いたなんて。
女　あら、狙いはあるわよ。
男　えっ？
女　狙いがなくて、人を好きになったりはしないわ。
男　そりゃあまあ・・・
女　何の狙いも見返りも求めない関係なんて嘘よ。奉仕？ボランティア？
男　勿論そんなことはないさ。
女　それとも宗教的な愛？
男　違うよ、それは。

女　そうよね。そんなんじゃない。だったらエロス。
男　エロス？
女　アガペーとエロス。知らない。
男　知ってるさ。でも、君は教養あるんだね。
女　顔に似合わずっていう事？
男　そんな事は言ってない。
女　お互いに与えつくす愛アガペーと奪い尽くす愛エロス。どっちがお望み？
男　そりゃあ、奪い尽くす方がいいだろう。
女　質問！三回しか会っていない勇三は、いずみから何を奪おうとしているのでしょう。
男　それは、なんというか・・・・
女　困ってる、可愛い・・・（男の唇をほんのちょっとつつくようにキスする）

男すかさず、ディープキスに持っていこうとするが、見事に外される。

女　まだ駄目。じゃあ、仲直りに、あらためて乾杯！（グラスを鳴らして、）

男　乾杯！（男は一気に水割りを飲む）ふーっ！

女　（残りの水割りを飲む）お代わり？

男　いや、いい。もう少し話をしてから、又飲もう。

女　そう？（女の携帯電話が鳴る。携帯の画面を見て、男に）ごめんなさい。メール。

男　あゝ、わたしに遠慮はいらないよ。

女　いいの、腐れ縁なの。

男　腐れ縁？ふーん。しつこいってこと？

女　いいえ、そうじゃないけど、なんか・・・やめましょ、せっかく楽しくなりそうなのに。

男　勿論さ。

女　気になるの？

男　そりゃあ・・・

女　例えばわたしの過去の事でも？

男　気にならないと言えば、嘘になるな。勿論今現在の、ここにいるいずみちゃんがいいわけだし。

女　いいって何？ちゃんと言って。
男　だから、その・・・
女　そのなあに？
男　好きな訳だし・・・
女　誰が？奥さんが？
男　（ギョッとして）なんで、知ってるの？奥さんがいる事。
女　（笑う）だって・・・
男　俺言ったかな・・・
女　普通、勇三さんぐらいの年だったら、奥さんがいる方が自然でしょ。
男　かまをかけたな。
女　そうよ。で、どうなの？好きって、誰の事？
男　勿論いずみちゃんのことさ。
女　だったら、奥さんと別れて。
男　えっ？
女　別れてよ、奥さん。
男　いや、それは・・・三回だよ、君と会って三回。
女　どうして？だったらおかしいじゃない。わたしが好きだなんて。

男　だから、それはあるだろう。人が人を好きになるという・・・

女　たった三回で？

男　それはあるさ、三回だろうと、出合い頭だろうと、人は。

女　人の話じゃないの、わたしたちの話をしているの。

男　だから、わたしは・・・

女　もういい。狙いわかっちゃったから。

男　狙い。

女　要するに、あれでしょ。旨い事言って、躯が狙い。そうでしょ。

男　いや、そんな。違う！違うよ。

女　何が違うの。

男　だから、好きだから・・・

女　その次は何？

男　おかしいな。

女　何がおかしいの？おかしいのは勇三さん、あなたじゃない？

男　いや、ちょっと躯がこう・・・だるいと言うか、なんか・・・

女　話を反らすのね。

男　そうじゃないんだが、なんかおかしいな・・・

女　だったら何？

男　えっ？
女　躯じゃなかったら何が狙いなの。
男　だから、ねらいなんか、ないんだ。ただこうやって君じゃなかったいずみちゃんと話をして、いろいろ分かり合って・・・
女　話をして、わかりあう？本当に？
男　そうだよ。
女　感じあうんじゃないの、男と女は？分かり合うのか……
男　あ、いやそれは・・・あーなんだこれは・・・あれ？

男はそのまま、崩れるように眠ってしまう。
女ふっと笑うが、緊張して、立ち上がる。
暗転。
灯りつくと、男は椅子にベルトで縛られ、手錠をされ、手ぬぐいで、猿轡をされている。眠っている男、ややあって男、目を覚ます。
暫く、男は何ごとがあったのか分からない。やがて、自らの立場に気付き、驚愕する。
『うー、うー』と喋ろうとするが、声が外へ漏れない事

を知る。
男は静かに様子を観ることにした。ややあって、着替えた女がやってくる。

女　ぐっすり寝たようね。
男　うー。
女　何？
男　うー。
女　あー、駄目。幾ら地下室でも、叫ばれたらこまるから。
男　（首を振る）
女　ごめん。信じられない。きっと叫ぶもの。
男　うー（ト首をふるが）
女　いい？逃げようったって駄目よ。わかる？
男　（うなずく）
女　まず第一にわたしには仲間がいるの。

女は自分の、携帯電話を取り出して、男に見せる。そこには男の娘が映っていた。

女　第二、この通り、あなたの可愛い娘は私達の手のうちに確保されている。

男　（驚愕の表情）

女　いい？分った？だから、叫ぶのはやめなさい。わかったら、猿轡取ってあげる。それから、第三、何故という質問はなし。いいね。わかったら二回うなずいて。

男　（二回うなずく）

女は男の猿轡を解く。

男　はー、（ト息を吐いて）一体・・・・

女　質問はなし。もう一回縛る？

男　わかった。水が欲しい。

女　いいわ。分かってるわね。

男　叫ばないよ。分かってる。しかし、娘の幸恵がなぜ？

女　なしっていったでしょ、何故はなしって。

男　あゝ、すまない。つい。

女　ついとか、うっかりは許せないの。どうしてか、今に分かるわ。
（と言って水を取りに行く）

男、女が出て行ったのを確かめると、手錠を外そうと試みるしかし、無駄だとわかって、今度は躯を縛られている、ベルトを解こうともがく。夢中になっていると女が水のボトルを持って戻ってくる。

女　何をやってるの！
男　・・・
女　そんな事まで言わなきゃ、わかんないの。逃げようとは決してしないって、そんな当たり前の事まで。
男　すまない。
女　そんな簡単な言葉ではすまないって事が今にわかるから。
男　わたしになんか恨みがあるのか？
女　さあ、どうかしら。
男　わたしと出会ったのは偶然じゃないな。
女　さすがは先生。だてに医学部は出てないわね。

男　水をくれ。

女　いい？くれとか、こうしろとか言える立場じゃないって事が、そろそろ分って来てもいい頃じゃないの、ね、先生。

男　（くやしそうに）水を下さい。

女　いいよね。水を下さい。はい。と水が出てくる。これは普通のことなの。だけど、例えばイラクではそれさえも難しい。わかる？普通の事が難しいのよ。

男　わからない。わたしが、水を飲みたいという事と、イラクがどういう関係があるのか。

女　頭がいい割には、わかりが悪いわね。それとも世界観というものが欠落してるの先生には。

男　何でもいい。お願いだ、水を下さい。

女　わかった。どうぞ（ト水のボトルのキャップを外して手に渡す）

男　（水を飲もうとするが、上手く口までボトルの先をもっていけない）たのむ、ベルトをとってくれ。これじゃ飲めない。

女　無理。

男　無理って、こっちも無理だよ。

女　だったら無理しなければ。

男　おい！

女　（ボトルを取り上げ）おどしたってだめよ。欲しがってるのは、あなたで、その欲望を満たす鍵を握ってるのはこっちなんだから。わかる？

男　わかってるよ。お願いだから、とにかく水を飲めるように、手を楽にしてほしい。いや、して下さい。

女　駄目！水飲まして上げるわ。それならいいでしょ。

男　（半ば諦めて）あゝ、頼みます。

女は男の顎を掴んで、男に水を飲ませる。水は男の口から微かにこぼれる。

男　ううっ！

女　もういいの？

男　あゝ、ありがとう。

女　簡単にお礼は言わない方がいいわよ。

男　なぜとは聞かない。なんでもする。ただ娘の幸恵は開放して欲しい。

女　さあ、それはどうかな。先生次第ね。
男　だから、なんでもすると言ってるじゃないか。
女　とはいっても、出来る事と、出来ない事があるわ。
男　いいか、一つだけ言っておく。万が一娘の幸恵を、例え一ミリでも傷つけたら俺は、お前と、そのお前の仲間とやらを地の涯まで追い詰めて、人間である事を止めさせてやる。
女　いいな、単なる肉と骨の塊に砕く。お前らを肉骨粉にしてやる。おどしがきくくらいなら、はじめから、こんな事企てないよ。
男　だったら何だ！何故！
女　なしっていったでしょ。
男　何故がなしには始まらない、始まらないんだよ。人と人の関わり、人と人のあらゆる争いは何故から始まってるんだから。
女　いいわ。だったら説明しましょ。三年前の春の事よ。
男　三年前？

女の持っている携帯電話が鳴る。女、それを取り出して。

女　先生、あなたの携帯よ（携帯の表示を見て）奥さんから。（女ナ

イフを取り出し、それを突き付けて）いい？わかってるわね。

男　何が？

女　何がじゃないでしょ。（ト一旦携帯を切る）娘がどうなってもいいの。

男　わかった。今何時だ。

女　夜中の一時を回った所よ。

男　一時・・・しかしなんて言ったらいいんだ。

女　緊急のオペが入ったって言うのよ。よくある事でしょ。

男　あんまりないな。信じるかな。

女　信じさせるのよ。

男　やってみよう。

女は電話ボタンを押して、電話を男の耳と口に近付ける。
そしてナイフの先も油断なく突き付けている。

男　もしもし、アー、わたしだ。えっ手術だよ。手術が入ったんだ緊急のね。だから今夜は・・・えっ？幸恵が？しょうがないな。誘拐とか、そういうことはないだろう・・・（女キッとする）・・・

いや、だから様子を見て・・・警察？警察は止めなさい。わかった。又電話する。

女は電話を切る。

女　また電話するは余計ね。

男　だって向こうから又かかってくるかもしれないだろう。

女　外泊はしないってわけ？。

男　わたしは当直以外基本的に外泊はしない。

女　先生じゃなくて、幸恵って娘の事よ。

男　箱入り娘でね。門限は十時と決めてある。

女　嘘よ！

男　どうして嘘だって言える。

女　調べたもの。あんたが聞いたら、ぞっとするような、娘の普段の素行も調べたのよ。

男　ほう・・・だいぶ周到に準備したんだな。よっぽど大掛かりな組織なのか。

女　いや、そんな・・・

男　すると、少人数？それとも二人？三人？
女　その手に乗らないよ。
男　・・・話を元へ戻そう。
女　どこへ戻すの。
男　三年前さ。
女　そこへ戻る。覚悟はいいのね。
男　ここまで来て、覚悟も何もないだろう。
女　そう、いい度胸だわ。あれは三年前の春だった・・・

暗転。
灯りつくと、今度は女が猿轡をされて、椅子にベルトで縛られている。男が椅子の方向を逆にして、向かい合って、腰掛けている。

男　どうだ。拘束されてる気分は？
女　うー
男　よっぽど変な趣味でない限り、いやなもんだろう。
女　うー

男　油断したな。たった一本のナイフと女の力じゃ、ちょっと無理があったな。

女　・・・

男　猿轡は外してやろう。ただし、叫ぶのは止めた方がいい。ここにわたしを連れ込んで、縛ったのは君の方だ。叫べば警察を呼ぶ事になる。だが、その前に確かめておきたいことが二、三あるんでね。わかったか。

女　（うなずく）

男　一、二はなくて、第三、「何故」と質問したら、必ず答える事。いいね。わかったら二度頷くんだ。

女　（二度頷く）

男　よし。（ト猿轡を取る）

女　フー！水。

男　ほう？縛られてるのはそっちだよ。頼み方があるだろう。

女　水！

男　甘く見るな。

女　水を下さい。

男　よし、それでいい。

男、水を取りに一旦ドアの外へ出る。女は例によって縄を解こうと、奮闘するが、なかなか溶けない。

男　（水のボトルを手に入ってきて）なにをやってるんだ。

女　・・・

男　あんたと同じ事を言わせるな。（女の携帯電話を取り出して）見事に、電話番号の履歴を消してあるな。周到な計画だ。ほめてやろう。だが言え、幸恵はどこだ。仲間は何人だ。

女　知らない。

男　知らないだと？

女　知ってても言わない。

男　水はやれないな。

女　・・・

男　だんまりか、いいだろう。仲間から電話かメールが来るのを待とう。

いいか、こんな事は言いたくはないが、わたしは外科医だ。メスを取り人間の皮膚を切る事には馴れて居る。いや、馴れてい

るどころか、そうした行為はむしろ日常とも言える。勿論、一々患者への感情を持って手術なんかしやしない。わかるかな。

女　いい気持ちでしょうね。

男　何？

女　ひ弱な、若い女を縛り付けて、脅す。それはなんの快感？

男　おい。いいかげんにしてくれ。仕掛けたのはそっちだぞ。それにひ弱だと？勘弁しろよ。ひ弱な女が、ウイスキーに睡眠薬を入れて、男を縛り付けたりするか？少なくともこの日本ではひ弱な女は、二十世紀に消えてしまったんだよ。ズボンを履いて、大股で歩いて、ボトルの口から直接水を飲むようになって、庇護されるべきひ弱な女なんか、居なくなったのさ。

女　しゃべりすぎだよ。職場だけにしたら、おしゃべりは。

男　だったら答えろ。仲間はどこだ！娘の幸恵は何処だ！

女　どっちか一つなら水と交換に答えてあげる。

男　よし、幸恵の居場所だ。

女　携帯の中。

男　何？ふざけてるのか。

女　マジよ。だから、あんたの可愛い幸恵は携帯の写真の中に居る

の。

男　なんだって？

女　ただ写真を撮っただけ。仲間の男が知り合ってね。

男　じゃあ、幸恵が誘拐されたっていうのは嘘か。

女　そうよ。今頃、遊び疲れて、家に帰ってるんじゃないの。

男　くそ！見事に騙された。あんたの仲間は何処に居る？

女　答えは一つだけ。水くれるって言ったでしょ。

男　あゝ、約束だ水をやろう。

男は水のボトルのキャップを明け、女に渡すが、女は飲む事が出来ない。そこで、女がやったように、男は女の顎を掴み、やゝ乱暴に女の喉に水を流し込む。

女　ううッ・・・

男　口移しだっていいんだぜ。

女　誰があんたなんかに！

男　ほう？最初、睡眠薬を飲ませる為に、キスまでしたのに。

女　他に手がなかったからよ。

男　ほう、そういうもんか。勝手な理屈だな。
女　もう、帰ったら。娘は無事なんだし、ベルトを外して、私を縛ったんだし、もうここにいる理由、ないんじゃない。
男　そうは行かない。
女　何故？
男　やっといったな、何故と。教えてやろう。君の話によればだ。
女　はっ？
男　君の話によれば、幸恵は誘拐されていない。だがそれを確認したわけじゃない。
女　じゃあ、確認すれば。
男　あゝ、望む所だ。

男は自分の携帯電話のスイッチを入れ、自宅に電話する。

男　あゝ、わたしだ。幸恵は帰って来たか？・・・電話は？・・・ない。いや、様子を見るんだ・・・何か、その何かのっぴきならない事があったんだろう・・・いや、大丈夫。大袈裟にするな・・・わたし？駄目だ帰れないよ・・・あゝ、大丈夫だ。又

男　電話する。（ト電話を切る）
幸恵は帰って来ていない。
女　たまたまでしょ。
男　言っただろう。外泊したりする子じゃない。
女　言ったでしょう。外泊はしなくても、やる事はやってるわ。
男　わたしはいい。だが家族を侮辱するな。
女　三年前、あんたに殺されかけたのは、わたしの家族よ。
男　殺されかけた？あれは事故だったんだ。
女　事故？
男　あゝ、よくある事故だ。手術にだって事故はある。
女　ミスでしょ。
男　ミスとは言い切れない。
女　そうやって、自分の立場を守る事しか言えないの。
男　だから、ミスとは言い切れないと言っているんだ。
女　だったら何なの、あれは。
男　勿論こんな過激な事をしないで、話し合いで君が来たなら、あの手術についての再調査だって出来た筈だ。
女　嘘ばっかり。

男　嘘？

女　そう、嘘よ。あれから何回病院に掛け合ったと思うの。

男　なんだって？それはわたしは知らない。

女　知らない？

男　本当だ。知っていれば、君にわたしは会ったろう。あって、当時の状況をちゃんと説明した筈だ。

女　説明した筈。筈ね、それで妹が、元どうりに帰ってくればね。

男　君の妹さんには、すまない事をした。

女　私を縛って、こんな風にしたままで、それであやまってるつもり。

男　それとこれとは違うだろう。

女　どう違うの？

男　だから・・・

女の携帯電話のベルが鳴る。男テーブルの上のそれを取る。そして、ナイフで脅しながら、女の耳と口に携帯電話を持って行く。

男　出ろ！わかってるな。

女電話に向けて喋りだす。

女　もしもし・・・こっちは大丈夫。いや、もう目を覚ましたよ・・・それはいいよ・・・大丈夫だって・・・それじゃあ。（ト電話を切る）

男　随分、短いじゃないか。

女　いつもこうよ。

男　いつもの事を聞いてるんじゃない。今の電話だ。

女　特に報告する事はないもの。向こうは、あんたがまだ縛られていると思ってるもん。

男　どうかな？

女　どういう事？

男　短い電話で、話の途中で切れば、向こうはこっちの異常事態に気付く。誰だって考え付く事だ。

女　だったら逃げればいいじゃない。逃げなさいよ。私の仲間８人がすぐ押し掛けて来るわよ。

男　８人は嘘だね。
女　だったら何人がお好み？希望どうりに人数を言ってあげるわ。
男　ふざけるな！
女　ふざけてるのはどっちかなー。
男　いい度胸だ。
女　先生もみせかけの度胸を造って、つっぱらなくてもいいのよ。
男　わたしはつっぱってなんかいない。ただ正確に娘の状態を知りたいだけだ。
女　だから、何もしてないって。
男　証拠がないだろう。
女　じゃあ、好きにすれば。
男　手を、ゆるめてあげよう。
女　うしろめたくなったのね。少しは自分のしでかした事の大きさが分った？
男　ゆるめようとしてるんだ。せっかくのチャンスを噛み付いて、自分でつぶす事はないだろう。
女　そうね。わたしたちもっと仲良くしなくちゃね。だって、これから長いんですもの。

男　（縄をゆるめて）なんという女なんだ。そうやっていつも男をたぶらかしているのか。「噛み付き、しかとして、次の瞬間すり寄る」

女　一体誰に教わった？

女　あんたの可愛い娘幸恵ちゃんによ。

男　幸恵？まさかあんたは・・・

女　そう、幸恵ちゃんとわたしはとっても仲がいいの。

男　いつから？

女　もう二年以上になるかな。聞いてごらんなさい。「いずみちゃん？とってもすてきなお友達よ」っていうから。

男　お前は・・・

女　お前とか呼ぶのはまだ早いんじゃないの？ねえ勇三さん。

男　そうか、なにもかも計画的なんだな、計画的な犯行！よし！

女　犯行？違うわ、これは復讐よ。あるいは清算。それとも、あなた方は総括と呼んだ方がしっくりくる？

男　なんでもいい。それで何が望みなんだ。

女　（笑いだす）おかしい。

男　何がおかしいんだ。

女　だってそうでしょ。普通、縛られた方に要求を聞く？逆でしょう。

男　なんでもいい。金か？

女　ほら、すぐそれ。「女？厄介事？スキャンダル？金だ金をやっとけ！」

男　違うだろう！

女　そんなものよ。金持ちは都合の悪い事があれば、すぐお金で解決しようとする。

男　最初に聞いたはずだ。何が望みなんだって。

女　望みはあるわ。

男　だからー

女　妹の香純（カスミ）を返してくれる。

男　返すって。

女　普通にして、返して。

男　さっき君が言ったろう。出来る事と出来ない事があるって。

女　だって、望みなんていうから・・・望みっていうのは希望でしょ。夢でしょ。違うの？

男　それはそうだ。

女　だったら返してよ。妹を元どおりにして、返して！香純はただ、ひどく頭が痛かっただけなんだから。

男　思い出した。今思い出したよ。十二歳の少女だ。三年前の春だ、丁度病院の庭の桜が散りかけていた。そう、ただあれは、単純な頭痛じゃなかった。

女　ＭＲＩの検査で見ても、脳動脈瘤の疑いがあった。疑いがあった？その程度なんだよね。患者なんて、ベルトの上を次々と運ばれてくるダンボールの箱なんだ。

男　箱？ダンボールの。

女　そう。多少形や大きさが違うだけ、先生にとって患者は、早くこなして片付けなきゃならない箱なんでしょ。

男　そんなことはない。ちゃんと顔は見えてる。少なくとも手術をした患者の顔は、だからこそ、思い出したんだ。

女　嘘よ。香純は、クモ膜下出血と言われたわ。

男　だから、それは動脈瘤が破裂してクモ膜下出血を起こす可能性を指摘したんだ。

女　可能性？可能性であんな事になる？香純は寝たきりなのよ。

男　いいか、脳動脈瘤の手術は非常にむずかしい。ネッククリッピ

ング手術といって、特殊なクリップで、その動脈瘤を挟んでつぶす。ただし、動脈瘤の場所によっては、非常に危険をともなう手術だ。

女　今更そんな解説をされてもどうしようもないわ。とにかく手術前、妹は笑っていた。それが最後の笑いになった。今では、無表情に天井を見つめたまま、氷のように固まったまま・・・誰よ、誰がそんな風にしたの。

男　とにかく、もう一回、カルテを見て、もっと正確に手術の状況を把握してみよう。約束する。

女　・・・妹を返してよ。香純の笑顔を私達家族に返してよ。あなたのつぐないはそれ以外にはないのよ。

男　そうだ思い出したぞ、殿村香純。患者の名前だ。するとあんたは殿村いずみ。

女　甘いわね。最初から本名を名乗ると思うの。臣　勇三先生。

男　それは不公平だろう。こっちは本名を知られてて、君の名前は知らない。このゲームは公平じゃない。

女　先生にとってはゲームでも、わたしに取っては、生死を掛けた復讐なの。ふざけてると命ないわよ。

男　なんで思い出したか言ってやろう。私の名前は臣下の臣だ。ところが患者の名前が殿村だった。殿に臣下か、まるで逆転してるんじゃないかと思ってね。よく覚えてたんだ。

女　嘘よ！

男　嘘？

女　あの手術の事は、帳じりをあわせようとして、病院で何度も会議や院長の事情聴取があったはずだわ。その所為で名前が忘れられないのよ。

男　いいか、一つだけ疑問に答えてくれ。

女　答えられる質問なら。

男　何故、裁判にしなかったんだ。

女　裁判？この国の裁判をどう信じたらいいの。

男　でも、やってみなきゃあ、わからんだろう

女　はじめから分ってる。

男　どう分ってるんだ。

女　何年もかかって、もし裁判に勝ったとしても雀の涙程の慰謝料を貰って終わりよ。裁判は、貧乏人や弱い者には向いていない。

男　そんなことはないだろう。

女　いいえ、裁判は、むしろお金持ちに向いたゲームね。そんなゲームで遊ぶ程わたしは暇じゃない。
男　ゲームか。
女　わたしが何を許せないと思う。
男　それは・・・
女　十二歳の妹を寝たきりにしてしまった、その相手、臣　勇三先生、あんたよ。わたしは病院から慰謝料を取ってもしょうがないの。
男　なるほど。そういう事か。
若い男　やっとわかったかな。

若い男がいつの間にか、男の背後に忍び寄っていた。

若い男　ちょっと理解が遅いけどな先生。（若い男は背後から医師にナイフを突き付けていた）
男　そうか・・・そういう事か。
女　先生、仲間がいるのは知ってたでしょ。
男　来ると思ってたさ。あの短い電話のやりとりで、なにかを感ず

かない方がおかしい。
若い男　何故だ？分ってたのに何故？
女　止めなさい、俊（トシ）！
男　ほーう、俊（トシ）という名前か。
若い男　ベルトを外せ！
男　わたしがか？
若い男　そうだ。黙って言うとおりにしろ。

男、女のベルトを解く。

男　さあ、今度はわたしが縛られるのか。きりがないな。俊君とやら、君が縛られたらどうだ。
若い男　うるさい。
女　冗談が出るのは今のうちよ。（女若い男からナイフを取って）俊、早く縛って。
若い男　あゝ。（ト男を縛る）
男　やれやれ……俊君は彼氏か、いずみちゃんの。
女　関係ないでしょ。

男　おい。何をする。
女　うるさい。（カードを何枚か取り出す）銀行のカードじゃないほうがいいな。これか。臣先生。暗証番号
男　やっぱり金か。
女　違うね。金もそのごく一部っていう事。
男　ごく一部だと？
女　まずこれ。暗証番号。
男　０１１０百十番
女　ふざける暇はないんだ。幸恵ちゃんはどうなってもいいの？
男　くそ！５８０６だ。
女　根拠は？
男　根拠？
若い男　待って！
女　何？
若い男　なんで、暗証番号に意味を付けるのかな。
女　なんなの！
若い男　だって意味なく付ければ、暗証番号を人に知られる事はないでしょ。

男　なるほど、そのとおりだ。
女　俊！やめなさい。今はその事はどうでもいいの。（男に）根拠は何？
男　女房の生まれた年１９５８年の５８と誕生月の６月で０６。
女　こっちのカードは？
男　５５１２
女　根拠！
男　私の生まれた年と月。
若い男　あゝ駄目だよおじさん。単純過ぎて誰にだって見破られちゃう。
男　ほう、そうかな。
若い男　そうだよ。僕はそっちの方面は詳しいんだ。研究してるのさ。
男　研究？
女　俊！（男に）もう一枚は？
男　いや、それだけだ。
女　あるでしょう８３０３っていうカードが。
男　何故分る。

女　娘の生まれた年と生まれ月の組み合わせ。こんなのすぐわかる。
若い男　お姉ちゃんすごい！
女　バカ！
若い男　あっ、いけねえー。
男　そうか、彼氏じゃなくて弟だったのか。
女　自分からバラしてどうするの？
若い男　ごめん・・・でも、僕やっぱり無理だよ。
女　今更何！
若い男　無理なんだ。僕、人を脅したり、出来ないよ。
女　いいから、カバンかポケットからもう一枚のカードを探すんだ。
若い男　お姉ちゃん僕・・・
女　俊！

言われて、俊はカバンを探す。そして、男のズボンの後ろのポケットから、財布を取り上げる。風の音がする。

若い男　あった。これかな。
女　（カードを取り出し）これで全部。

男　そうだ。金はやる。金はやるから、幸恵とわたしを解放してほしい。
女　言ったでしょう。それは一部だって。
男　だが・・・
女　又、猿轡をしようか？
男　分かった。もういい。
女　俊、このカードで金を降ろしてくるんだ。
若い男　いくら？
女　いくらって、目一杯だよ。最初に残高照会やって、借りれる金全部。
若い男　お姉ちゃん僕・・・そんなこと・・・
女　いい？俊、わたしたちがどんな思いで、この三年を過ごして来たか忘れたわけじゃないだろうね。
若い男　忘れやしないよ。
女　だったら、テキパキとやるんだ。
男　風だな。雨も降ってきた。そういえば、暴風雨になるって言ってたな。
女　黙って。

男　迷ってるんだよ。君の弟はー
女　何？
男　確かに、妹の香純さんが植物人間になってしまった。
女　言うな！植物人間だなんてあんたが言うな。
男　失礼。とにかく、寝たきりになってしまったことの一因はわたしにあるかもしれない。だがそれをこういう形で、復讐したり、犯罪まがいに弾劾するのは正しくないと、そうだね、そうなんだろう俊君。
女　止めろ。
男　俊君、そうなんだろう。あんたは優しいんだ。こんなことで解決はできないって、知ってるんだ。だから話し合いで、話し合いで何とかしようと・・・

音楽ー灯り変わって、男が立ち上がる。光の中、男は縄を取り、モノローグを始める。

男　話し合いです。勿論こちらにミスがあるんですから・・・・
いえ、でもそれは認めてもいいんじゃないですか？・・・何故？

病院の権威。権威ですか・・・しかし院長、権威もさることながら、過ちは認めて、患者の信頼をきちっと取り戻す事のほうが・・・いや、勿論わたしは構いません。ちゃんと謝罪しますよ・・・不祥事が続き過ぎる？いや、あれとこれは別でしょう。あれはただ個人の破廉恥罪ですから・・・医療ミスとは・・・いえミスでしょ。わたしははっきりとそう認識しています・・・ですから、話合いの場にわたしを・・・駄目ですか・・・わたしはいいんです。医者として失格の烙印を押されても・・・そうですか・・・もう一度聞きます。それは、理事長を含めた、病院の決定なんですね。

男元の椅子に戻る。

女　俊！ちゃんとしばって。

俊は男を椅子にしっかりと縛り直す。

男　そうだ。話し合いだ。話し合おうって、わたしは言ったんだ。

女　なんの事？

男　わたしは提案した。いや提案というより嘆願したんだ病院側へ君達と話し合いたいと・・・

女　遅いのよ先生。例えそうだったとしても、もう全てが遅いの。

男　なあ、俊君。君はこんなことは望んでいない。いや、いずみさん。あんただってこんな事を望んではいないはずだ。そうだろう。

女　先生、喋り過ぎが命取りだよ。

男　こんなことは止めよう。君の妹の香純さんだって、こんな事は望んではいないきっと。いいか、これは明らかに犯罪だ。私達はそこまで行かずに話し合いで解決できる筈だ。

女　もうとっくに私達はルビコン河を渡っている。

男　なるほど君はカエサルか。その若さで、それだけの教養を持ちながら、何故こんな事に。

女　何故、何故、何故？古いよ。

男　なんだって？

女　新しい人間は、もう、誰も他人にたいして、何故とかどうしてとか聞かなくなってるの。

男　じゃあなんで生きてるんだ。何故とか、誰だとか問い掛けもなしに・・・

女　もう、とっくにそういう事無しで、私達は人と繋がったり、切ったりして普通に生きてるのよ。

男　だったら縛るのもやめろよ。これこそ人に命令したり拘束する、古臭い手段じゃないか。

女　信頼がないからね。

男　信頼？そんなものは初めからあったとは思えない。

女　俊！早く、金を下ろしてきなさい。

若い男　僕には出来ないよ。

女　俊！お姉さんがどんな気持ちで、ここへたどり着いたか、分るでしょう。

若い男　分るよ。わかるけど・・・

女　分ったら、計画どうりにやるの。

若い男　この人を解放してやろうよ。

女　何をいいだすの？

若い男　この人は、僕たちを信じようとしているんだよ。

女　俊！お願いだから、そうやって、どんどんそれてくのは止めて。

若い男　お姉ちゃん一人でやればいい。
女　なにを言ってるの。私一人じゃ出来ないから、だから・・・俊！
若い男　僕には無理だ。人を脅したり縛ったり、お金を取ったりそんな事は僕には出来ない。
女　何をびびってるの？何がこわいの？
若い男　怖いとか、そういう事じゃないんだ。
女　だったら何？
若い男　なんの権利もないのに、他人を傷つけるのは嫌なんだ。
女　権利はあるのよ。だって、香純はこの男のウッカリミスで、寝たきりになったんだよ。鼻に管を入れられて、食事も自分で食べられなくなったんだよ。
若い男　それは分っている、でも僕には・・・
女　分った。じゃあ、お金を引き出してくるから、しばらくこの男を見張ってて。何もしなくていいの。あんたはここに座っているだけでいいから。
若い男　でも、それは・・・
女　それぐらいやってよ。わたし一人でやるから、お願い俊！
若い男　分った。ここにいて見ているだけでいいんだね。

女　そう。すぐ帰ってくるから（女はウエストポーチに必要な物をまとめて入れて）

若い男　あゝ・・・

女　じゃあ、いいね。

女は出て行く。扉を開けると暴風雨の音激しく入り込む。

若い男と縛られたままの男残る。

男　雨が凄くなってきたな。

若い男　・・・

男　大丈夫かな、お姉さん。

若い男　心配なの？

男　君は心配しないのかい。

若い男　聞いてるのは僕だ。僕が聞いてるんだ。

男　そりゃあ、心配さ。

若い男　何が？お金か、お金が取られるからか。

男　そうじゃない。君のお姉さんが心配なんだ。

若い男　何故？

男　だって風が吹いてるだろう。雨も激しい。何かが、例えばトタンが飛んで来たりするかもしれないじゃないか。
若い男　俺たちの母さんは死んだんだ。
男　えっ？
若い男　妹が手術をする半年前だ。
男　ご病気だったのかい？
若い男　そんなことは今言いたくない。
男　お父さんは？
若い男　それもどうでもいいが、言ってやろう。妹の香純が生まれてすぐ、家を出て行った。
男　そうか・・・それは知らなかった。
若い男　知らなかった事を責めてやしないさ。だけど・・・
男　何だ。
若い男　母さんはいない。
男　それはもう聞いたよ。
若い男　だから、お姉ちゃんは母親がわりなんだ。
男　あゝ、それで。
若い男　（ナイフを取り出し男を脅して）お姉ちゃんとはどこまで

進んだの。
男　どういう意味だ。
若い男　僕に言わせるなよ、そんな事を。お姉ちゃんに何をした。
男　なんにも、してないよ。
若い男　嘘だ！あんたは嘘を言ってる。
男　嘘じゃない。
若い男　手も握ってないのか？
男　そりゃあ、手ぐらい握ったかもしれない。
若い男　手を握った・・・それから。
男　いや、それだけさ。
若い男　嘘は止めろよ。な、おじさん。（ナイフがほとんど首元に）
男　ちょっとそのう・・・唇をほんのちょっとだ・・・
若い男　口づけをしたんだな。
男　いや、挨拶だよ、アメリカやヨーロッパでよくする挨拶程度の・・・
若い男　ここは日本だよ。
男　ほんとうに、そのちょっと・・・
若い男　ちょっととかいっぱいとかそんな事はどうでもいい。僕の

お姉ちゃんと口づけをしたんだな。
男　だから・・・
若い男　どうなんだ。
男　した。しました。
若い男　それから？
男　それだけだよ。
若い男　嘘だ！
男　それ以上何もない。
若い男　何もない？そんな事は僕は信じないぞ。
男　信じてくれ。
若い男　いいや、お姉ちゃんは目的の為に手段は選ばない。手段は選ばないんだ。僕はいやだって言ったんだ。お姉ちゃんのそういう所がいやだって・・・
男　何もしてないよ、それ以上。
若い男　それ以上だって？どれ以上なんだ。おじさん。まさか、お姉ちゃんと、お姉ちゃんと、寝たり、いや、その汚い手で、お姉ちゃんの体に触ったりはしなかったんだろうな。
男　してないよ。そんなことはしていない。

若い男　信じられないな。だったら、おじさんはお姉ちゃんに何をしようと思ってたんだ。
男　なにをしようとか思ってないよ。
若い男　嘘をつくと大変なことになるよ、いいの？
男　思ってない。なにかをしようだなんて。
若い男　そんな筈はない。だったらここへ何をしに来たの。
男　何をしにって、ただ招かれて・・・
若い男　招かれて？
男　お酒でも一緒に飲んで・・・話をしようかと。
若い男　なんの話？
男　いや、だから、世間話さ、よくある・・・
若い男　よくある世間話？どういう？
男　だから、「風が出てきたねとか」「雨がふるかもしれないとか」
若い男　それは天気の話だろう。世間の話じゃないよね。
男　いや、それは・・・
若い男　世間話ってどんな話なんだよ。
男　仕事はどう？とか。仕事はつらくないかとか？
若い男　おかしいな。お姉ちゃんは自分の仕事の話をしたの？

男　いや、一般論だよ、一般論として、仕事上色々あるだろう。職場の人間関係とか、ストレスとか・・・

若い男　おかしいな。お姉ちゃんの仕事に職場の人間関係なんかないはずなのに。

男　いや、わたしだわたしの職場の人間関係とか、一般に言って、仕事とストレスとの関係とかそういう・・・

若い男　嘘だね。若い女の部屋にやって来て、おじさんはそんな話はしない。

男　どんな話だったらするんだ。

若い男　聞いてるのは、僕だよ。おじさんの頭を鋸で切って見たいなー、香純におじさんがしたように。そうしたら、分るのかな、おじさんがこの部屋に入ってきた時、何を妄想していたのかが・・・

男　おい。君、俊君。

若い男　俊君って呼ぶのはやめてくれないか。おじさんにそう呼ばれたくない。

男　悪かった。どう呼んだらいい？

若い男　僕の正式な名前は俊春なんだ。でも、俊とか、殿村とか呼

ばれるのはいやだな。
男　言ってくれ、なんて呼ぶ。
若い男　今は御主人様がいいかな。
男　えっ？
若い男　だって、今はおじさんは縛られてて、そういう関係だろう。
ゲームは大抵そうだよ。
男　あゝ・・・しかし・・・・
若い男　いやならいいんだよ。
男　わかった。御主人様、お願いがあるんですが。
若い男　分った言ってみろ。
男　このいましめをほどいてくれませんか。
若い男　いいよ。心の内を白状すれば解いてやる。
男　心の内ですか？
若い男　そうだ。この部屋に来て、お姉ちゃんに何をしようと思ったかを正直に。
男　言ったらほどいてくれますか。
若い男　御主人様は嘘はつかない。嘘はつかないから主人に御がついてるんだ。

男　はあ、それでは・・・
若い男　では尋問する、何をしようとしたんだ。
男　そのう、Hな事です。
若い男　H？Hじゃ分らないよ。具体的に詳しく。
男　まず、両手で肩を抱いて。
若い男　肩を抱いて？
男　唇を奪って。
若い男　唇を奪うってどういうこと？
男　だから、口づけをして・・・
若い男　それで？
男　その、さりげなく舌をからめて、唇を吸って・・・
若い男　そんなことするの？
男　いや、だから、そのさりげなく、椅子の上にこうかぶさる様にしていって、こう、手を、手で胸を？
若い男　胸？
男　いや、乳房を、乳房は生々しいか。おっぱいを、おっぱいはこっけいかもしれないやっぱりこの場合胸だよ、表現としては胸。
若い男　胸をどうしたの？

男　触って、触るだけじゃないんだ。もんで・・・いや下品だ。もみしだいて。余計いかんか、胸をいじくりまわし。あゝいかん。いかん。

若い男　どうしたの？

男　無理なんだよ、言葉で妄想は説明出来ない。

若い男　押し倒して、セックスしようとしたって言えばいいでしょ。具体的で分りやすいじゃないか。

男　そうか、そうなんだ・・・君の方がずっと分りやすい。そういう事なんだよ。

若い男　よし、約束だ。解いてやろう。（ト若い男は男の戒めを解く）

男　助かった。ありがとう。

若い男　ありがとうは言わない方がいい。

男　えっ？

若い男　僕は約束は守った。だけど、おじさんは許さないよ。

男　なんだって？

若い男　おじさんは、お姉ちゃんを汚した。その頭の中で、汚したんだ、だから、僕は許さない。

男　おい。

若い男　最初に言ったろう。ぼくには母がいないんだ。だからお姉ちゃんは僕にとっては母なんだ。あんたは僕の母を頭の中で、汚したんだ。（トナイフを構える）

男　よせ。何をする！

若い男　その頭は、切り開いて、お掃除をしてやらないとね。お掃除はどうしようかな、召使にさせようかな。そうだ、僕は御主人から召使になろう。召使になって、あんたの頭をかち割って、お掃除をしよう。（トナイフを振りかぶる）

男　やめろ！やめてくれ。

女がびしょ濡れで戻ってくる。

女　何をしているの。

若い男　お姉ちゃん。

女　俊！どういう事？見張っていなさいと言ったはずよ。

若い男　でも、こいつが、こいつがお姉ちゃんを汚したんだ。

女　どういうこと。

若い男　だってこいつは頭の中の妄想で、お姉ちゃんを押し倒して、

セックスをしようとしたんだ。
女　そんなこと。
若い男　そんなことって？
女　それより、嘘だったんだよ、暗証番号。
若い男　だから、お金を取るのはよそうって言ったんだ。
女　ちがうでしょう。この男はわたしを騙したんだよ。
若い男　お金を取るのは犯罪だよ。犯罪は止めよう、お姉ちゃん。
女　これは復讐なの。どういうつもりなの先生。
男　いや、ついうっかり・・・
女　ついうっかり？それで何でも通して来たんだ。「ついうっかり、手術ミスしてしまいました」「ついうっかり暗証番号を間違えました」それで何も彼もが通ると思うの？
若い男　お姉ちゃん・・・
女　何？
若い男　ちょっと・・・
女　なんなの？
若い男　この男は頭の中でお姉ちゃんを押し倒して。
女　俊。

若い男　何？
女　もう、そろそろいろんな事が分らないと駄目だよ俊。
若い男　どういう事？
女　だから、わたしはこいつととっくの昔に寝てるんだよ。
男　おいー
若い男　・・・
女　仕方ないさ、香純の恨みを晴らす為、しかたなかったのよ。
若い男　ううッ・・・（ト膝を付きうづくまる）
男　この子は君の事を母親の様に思ってるんだ。
女　それで・・・
男　だから、それでじゃなくて、今彼は、この私を殺そうとしていたんだぞ。
女　何を言ってるの。よくもそう次から次と嘘で固められたものね。
男　嘘じゃない。だからこうやって、いましめを解いて。
女　おかしいじゃない。殺そうと思う者がなんだって、いましめを解くの。そんなことはありえないでしょ。
男　だから、いや、ほんとなんだ！
女　もういい！この子はわたしがよく知ってるの。気が弱いのよ。

男　気は弱いかもしれない。だが・・・

女　俊はやさしいから、人を傷つけたり、犯罪的な事は出来ないのよ。

男　そんなことはない。あなたは知らないんだ。

女　知らない？何を？

男　だから、この子は・・・（若い男がゆっくりと立ち上がっていたのに気付く）

女　俊・・・どうしたの？

若い男　お姉ちゃん。このおじさんと寝たんだね。

女　そうよ。でもそうしたくてそうしたんじゃないの。

若い男　そんな事はどうでもいいんだ。僕は聞きたくなかった。お姉ちゃんの口からそんなことは聞きたくなかった・・・

女　出来ればあたしだって言いたくなかったのよ。

若い男　でも、僕は聞いてしまった。聞いてしまったんだよ。聞いた以上・・・（ナイフを持っている）

女　俊。

若い男　お姉ちゃん。もう止めてよ。

女　何？

若い男　いろんな男と寝るのは止めて・・・止めないと、僕は・・・
女　どうするの・・・
若い男　僕は、お姉ちゃんを。

ト若い男はナイフをかかげて、女に迫ろうとする。部屋から逃げかけた男は、逃げる事をやめ、間一髪、若い男を背後からベルトで素早く拘束する。
稲妻の閃光と激しい落雷音。３人凍り付いて。
暗転。
灯り付くと男と女がそれぞれ椅子に座って、眠っている。
やや沈黙があって。

男　（眠りから覚めて）あゝ、いつのまに・・・
女　ええ・・・
男　あのう・・・
女　何？
男　実は・・・あの後・・・
女　えっ？どの後。

男　三年前、手術に失敗した後・・・

女　あゝその事。

男　何度も接触しようとしたんだ。君達家族と。

女　もう嫌、嘘の積み重ね・・・

男　いや、今となってはどうでもいいが、本当の事なんだ。

女　それで・・・

男　ただ、病院の権威を守るという壁は、思いのほか厚かった。

女　そう・・・

男　だから、君も御存じのように、あの病院を止めて別の病院に移ったんだ。

女　ほんとの事？

男　ほんとうだ。

女　何故？

男　何？

女　何故、もっと早く言わなかったの。

男　あの展開で、言い出すきっかけがあったと思うかい。

女　それもそうね。

男　最初は驚いた。娘の幸恵までまきこんでいたんだから。でも、

女　わたしは思ったんだ裁かれてもいいと。いや、裁かれても仕方がないと。

男　だったら何故？もっと早く・・・

女　フフフ・・・

男　なんで笑うの。

女　さっきから、何故を連発してる。何故なんかなしに生きてたんじゃないの。

男　わたしは古いタイプの女なのよ。

女　そうか・・・古いタイプのね。

男　で？改めて聞くわ、何故？

女　何故だろう？あなたの事が気になったんだ。

男　気になった？

女　あなたが『誰』なのかと・・・

男　わたしはこんな女よ。これ以上何が知りたいの。弟がほとんど説明してくれたでしょ。表面は妹の香純を介護するやさしいお姉さん。裏は男達をたぶらかして、金を搾り取る悪い女。

女　そういう言い方はやめるんだ。

男　いいでしょ。私はこうなの。

男　自分で自分を卑下するのは良くない。

女　事実を言ったまでよ。いいえ、違うわ。ほんとうはたぶらかした男から金を取るばかりじゃなく、快楽までむさぼっていた。

男　やめなさい！

女　あなたが言ったから、わたしも本当の事を言ったの。

男　わたしの、所為だ。

女　うぬぼれないで。そんなことはない。

男　いや、わたしのほんのちょっとした油断が、あの手術のミスを招き、全てはそこが始まりかもしれない。

女　仮にそうだったとしても、わたしの欲求とそれを含めた生き方はあなたの所為じゃない。

男　でも、すくなくとも・・・

女　それはわたしなのよ。私の中にしっかりと埋め込まれているＤＮＡの所為なの。

男　医者の立場からはっきりと言う。

女　何？

男　確かに、逃れられないＤＮＡの遺伝子によって、人の躯と心は成り立っている。

女　それで？

男　だがもしＤＮＡが支配しているとしたら、それは過去と今ここにいる君だ。これから造りだす未来には、何の関係もない。

女　言えるの？本当にそれが正しいって。

男　言えるさ。医者じゃなく、人間としてはっきり言える。

女　そう・・・

男　いいか、自分を決め付けたら終わりだ。何かを決め付けれは、代わりに心の中で何かが凍る。若さとはそんなもんじゃない。

女　どんなもんなの？

男　もう、遠くなってしまった私にはわからないが、もっとしなやかなもんだろうしなやかで、柔らかくなんにでも変わっていける。

女　そうね・・・変わっていける・・・ほんとうかな？

男　ほんとうだ。

女　幸恵ちゃんには訳を言わずに協力してもらったの。朝になれば、お宅へ帰ってくるわ。

男　そうか・・・

女　もっと話を聞いてあげれば良かった・・・

男　えっ？

女　俊春の事よ。もっとわたしが、弟の気持ちをわかってあげてさえいれば・・・

男　すまない事をした。ああするよりなかった。

女　そうね・・・あの子ももう独り立ちしてもいい頃よ。

男　そうかもしれない。

女　それに、あなたは他人だしね。

男　でも、もうしがらんでしまった。

女　それから・・・

男　それから何？

女　いえ、いいの・・・

男　雨、上がったみたいだね。

女　そう・・・

朝の、光が差し込んでくる。

男　窓があったんだこの部屋。

女　今気付いたの？

男　あゝ、なんか夢中で、こんな地下室に窓があったなんて・・・

女　また・・・

男　何？

女　何があろうと、また、朝が来て・・・

男　朝が来て？

女　かけがえのない、一日が始まる。

男　あゝ・・・

女　さびしいね・・・

男　・・・

女　さびしくって・・・

男　あなたは『誰？』

女　さあ、それがわかればね・・・

男　『誰？』

女　さあ・・・

音楽。

光は閉じて・・・

了（おわり）